



捨てられていくものに命を吹き込むSIL社の宮尾隆弘代表

木製パレットが こだわり家具に

青果市場や運送業者から廃棄予定の木製パレットを引き取り、汚れや割れなど木材の表情を生かしたオーダーメイド家具などにアップサイクルするSIL社(和歌山県有田川町)が注目を浴びている。これまで活用されずに廃棄されてきたものに新たな命を吹きこむ画期的なアイデアだ。

(上野山 友之)

運送や倉庫での製品保管などで重宝されている木製パレット。年間約4500万枚が生産されているとされるが、それらは幾度も使用されるなかで汚れ、傷つきやがては活用されることなく、廃棄されていく。

年間約90万トに上ると推定される廃木製パレットは、これまでチップ化や燃料化、エネルギー回収を伴う焼却などでリサイクルされてきたが、新たな活用に取り組み事業者が現れた。

「有田みかん」や「ぶどう山椒」で知られる有田川町にあるSIL(エスアイエル)社は廃棄される予定の木製パレットを引き取り、割れ、ヒビ、汚れ、穴などを木材の豊かな表情と捉え、家具などにアップサイクルしている。

同社は引き取ったパレットを鉄工所と協働で自社開発したボールを用いて解体し、一つの木材の大きさや傷など、個性を見極めて選別。サ

ビヤ変形など手作業で抜くことが難しい釘を専用の機械で抜き、成形、圧着、研磨などを施し、独特の味と風合いで人気を集めるオーダーメイド家具や展示用什器、キャンプ用品へと生まれ変わらせる。

現在は、自社や協力店舗で、ダイニングテーブル5万円、イス3万円、棚5万円などの価格帯で販売している。

廃棄資材に命吹き込む

同社の宮尾隆弘代表は同町出身の41歳。「青果市場や運送会社で勤務する知人から木製パレットの処分に困っており、処分もそのほとんどが焼却されていると聞き、もったいないなと思った」(宮尾代表)。捨てられていくものに手を加えることで、誰かに大事に使ってもらえるものにしたいたいとの思いで同社を起業。福祉職から転身した。

立ち上げの際にも、廃業する建具店から木材加工の機械を譲り受け、近所の使われな



廃棄予定だったパレット材を使ったベンチ(税抜30000円)

くなった農業倉庫を借りて工場にした。宮尾代表は「木製パレットを使った製品の良さは、新建材には出せない材の味と複数の材を組み合わせることができるところ。自分の力で拾えるものがあれば、新たな命を吹き込んで、誰かに喜ばれる存在にできればいい」と笑顔で今後の展望も語ってくれた。

同町の住民主体のまちづくりに取り組むチーム「AGW」の一員としても活動するなど、多方面で活躍する宮尾代表。新たな展開でも我々を驚かせてくれそうだ。